

世紀転換期における有賀長雄の対外認識

報告者：伊藤信哉（松山大学法学部）

sito@cc.matsuyama-u.ac.jp

はじめに

(1)有賀長雄（1860—1921）の経歴と業績

- ◇明治期の日本を代表する国際法学者のひとりで、日本における外交史学の祖
- ◇高文実施以前（1882 年）に東京大学を卒業、伊藤博文系の藩閥官僚となる
- ◇社会学、哲学、心理学、教育学、国家学、国法学、行政学、財政学、国際法、日本史、法制史、外交史、欧洲政治史、文学の領域で著作を遺す
- ◇早稲田で初めて本格的に外交史を講義（1896 年）。月刊誌『外交時報』も創刊（1898 年）

(2)本報告における問題意識

- ◇この「最初期の国際情勢の専門知識人」ともいえる有賀が、1898—1904 年ごろ、どのような対外認識を有しており、これを世に広めようとしていたか

1. 認識の枠組

- ◇抽象的な理念や、一貫した外交思想より「国益の維持と伸張」「国家的生存」に関心
 - この時期は欧洲列強（英仏露独）の合従連衡が目まぐるしく変化する時期
 - そのため有賀の対外情勢に対する評価も、頻繁に変化している（一貫性の欠如？）

- ◇欧洲列強の動向が主、東アジア各国（清韓両国など）は従に過ぎないという考え方

本邦関係の外交事件たる、其の外形に表はるゝ所は東亜に在りと雖も其の主動者及反対者は孰れも歐洲の強国なり、故に東亜に於て発起する外交事件の現在の真相及将来の傾向を知らむと欲せは勢ひ歐洲に於ける列強相互の關係を知らざる可からず（「歐洲列強の現在關係」〔3〕）

世界の大勢は英露独仏の向背に依て定まる、奥伊以下の諸国は蠢々徒に他の後塵を拝するのみ〔…〕吾人は遺憾ながら世人の已惚るゝ如く帝国は日清戦争の餘威に藉り一躍して一等国の伍班に列したりと言ふ能はず、而かも極東事件の処理には亦必ず何国と雖も帝国を度外視する能はざるは識者と共に認むる所、而して極東の外交なるものは北京若くは東京の外交に非ずして実は悉く倫敦、伯林、聖彼得堡若くは巴黎に於ける外交の反響に外ならざるを以て、心を外交の機微に潜むる者は三たび思を此ここに致して可なり（「歐洲半月外交史」〔26〕）

2. 清国分割問題（1898年）

- ◇口火を切ったのはドイツの膠州湾租借要求
 - 露仏同盟に楔を打ちこみ、対露関係を改善しようとするドイツの思惑
- ◇ロシアは関東州の永久占領を目論んでいる。またイギリスはこの動きを傍観するはず
 - 日本は態度を決めるべき…ロシアの要求を認めるなら、朝鮮で代償を要求せよ
- ◇イギリスがロシア牽制のため威海衛租借に動き出し、またドイツ接近を図る
 - 露仏 vs. 英独のどちらに与するべきかを決めるべき
- ◇有賀の見解
 - ①イギリスが動く前…ロシアの動きを黙認する代りに朝鮮で代償を獲得する
 - ②イギリスが動いた後…日本は中立的な立場を維持すべき
 - 何れも日本が実際に採った策と一致

3. 米西戦争（1898年）

- ◇アメリカの不正により引き起されたもので、これに荷担するのは「仁義に悖る」
- ◇アメリカのフィリピン領有には反対
 - 日本商人の南洋貿易を阻害し、日本の南方への膨脹の道を閉ざす
 - 将来、日本がフィリピンを併合する可能性を残すべき
- ◇米西講和会議で、フィリピン割譲が問題となると、改めて割譲に反対
 - ①清国の内地（日本経済の重要な市場）にアメリカを引き入れる端緒となる
 - ②日本の南方膨脹の余地を減少させる
 - ③割譲賛成派（英独） vs. 反対派（露仏）の対立図式の中で前者に与すると、ロシアと敵対関係が深まる危険性

4. 義和団以前の清国（1898年）

- ◇戊戌の新政（康有為）には批判的…このようなやり方での変革は不可能
- ◇清国と諸列強との、当面の関りかたとして「連合担保策」を提案
 - 日米英仏独露の6か国が連合条約を結んで、清国の独立と保全、また既存の各国の権益の尊重を相互に約束する
 - 1922年の9か国条約を先取りする提案

5. ファシヨダ事件（1898年）

- ◇フランスの対英感情の最悪化→露仏同盟が対独から対英へと転換するほどの影響
- ◇露仏と英の間で、ドイツの「取り合い」が起きる
- ◇英は日本にも提携を求めてくるだろう→これに応じるのは対露関係上「覚悟」が必要

6. 南アフリカ戦争（1899年—）

- ◇イギリスの勝利は間違いないが、当面、同国はアフリカ問題に注力するはず
- ◇よってイギリスは東アジア方面では露仏に妥協的になると予想される
- ◇露独仏はアフリカでイギリスに譲った見返りを、東アジアで求めるのではないか

7. 有賀の同盟論（1898年ごろ）

- ◇日英（独米）同盟は現実的でない
- ◇しかしロシアも信じるに足りない→日露同盟にも否定的
- ◇そもそも、固定的な同盟関係を結ぶことは得策ではない→限定的な「協約」を提案

8. 義和団事件（1900—01年）

- ◇日本が列国の中でも指導的、かつ清国との仲介的役割を担うべき
- ◇出兵については、他の列強の要請があつてから、はじめて中心的な役割を引受ける
- ◇実際の日本政府の対応には、概ね満足しているが、個別的な点には批判も多い

9. ロシアの満洲占領問題（1900年—）

- ◇ロシアは満洲の永久占領を目論んでいる→日本はあくまで反対すべき
- ◇英独は頼りにならない→日本はロシアとの戦争も覚悟すべき
- ◇露清交渉の中断（1901年4月）＝日本外交の勝利と評価
 - 一方で、他の列強の対露姿勢も見定められた
 - 将来、日露で戦争になっても、他の列強は（軍事的には）援けてくれない
 - 4年後、この予言的中する
- ◇ロシアの満洲方面への野心は変わらず（むしろ増大）、イギリスも頼りにならず

10. 日英同盟から日露開戦まで（1902—04年）

- ◇日英同盟（1902年1月）について、東アジアの平和維持に益すると評価
 - この時点で、欧州列強に東アジアの現状変革を目論むものはないと推定
 - むしろ懸念すべきは、清韓両国、とくに韓国の動き
 - 「韓国人同士私党間の争いが、ついには日英同盟の発動につながる国際戦争に発展する惧れもある」と指摘
- ◇ところがその後の事態は、有賀の予想とは異なる方向に（満洲撤兵をめぐる日露対立）
 - 早期開戦論を唱えるものも現れるが、有賀は「まず外交交渉を尽くすべし」と主張
 - ※平和主義を固持していたわけではない

おわりに（今後の課題）

- ◇本報告のような有賀の対外認識を、前後の時期とどうつなげていくか（時間的比較）
- ◇同時期の他の知識人、メディアの認識との比較・相対化（同時代的な比較）